

## 地域の課題と向き合った中学校総合的な学習の時間の育ち － 3 年間の「学級総合」を通して－

北原 遼司 高度教職開発コース

キーワード：総合的な学習の時間 「学級総合」 地域題材

### 1. 研究動機・研究課題

附属松本中学校では、総合的な学習の時間において、学級単位で題材を決め出し、同じ学級の仲間と 3 年間追究を続ける「学級総合」に取り組んでいる。本校に赴任するまでの私にとって総合的な学習の時間とは、年に数回、地域散策やボランティア活動を行ったり、宿泊学習や文化祭に向けての準備の時間に充てたりする時間だった。そんな私が「学級総合」を指導する立場になり、当初は不安と混乱の毎日を過ごした。私の学級は、姉妹学級である下平学級が取り組んできた浅間温泉の活性化活動を引き継ぐことになり、「浅間温泉まちおこC」にテーマが決定した。先が見えない状況の中、同じテーマに取り組む 2 学年先輩の下平学級の「学級総合」の授業を参観した。その日の振り返りに、私は次のように綴っている。

一人ひとりの生き生きと自身に満ちた語りが止まらない。総合が、学級の誇りになっている。今まで、私が見てきた話し合いと、温度が違う。他人事、綺麗事じゃない議論をしていた。友の意見に次々と反対意見が出た。授業が終わった後も、議論が止まらない。司会も板書もすべて、生徒が進めていた。どれも、私が知っている中学 3 年生の姿ではなかった。1C の生徒も、3 年生になったらこのような姿になれるのだろうか。

この授業参観以来、下平学級の生徒の様子を意識するようになった私には、「学級総合」の授業場面だけでなく、全校音楽集会や生徒会活動でも彼らの活躍が目立ってみえた。当時、なぜ「学級総合」を行わなくてはいけないのだろうと思っていたが、「学級総合」に打ち込み、学校生活の様々な場面で多くの生徒が力を発揮している下平学級の様子に憧れ、羨ましく思い、今まで経験したことのない「学級総合」に挑戦したい気持ちが湧いてきた。そして、下平教諭は、「学級総合」での育ちを、「総合的な学習の時間における、実社会や地域とのつながりを意識したテーマ設定により、単なる体験や経験のみならず、その活動の中に、人と深くかかわっていくことで、発信する能力やコミュニケーション力、判断力等、これからの時代を生きていく上で必要な力も育んでいる」（下平，2017）と考察しているが、目の前にいる自分の学級の生徒が、3 年間の「学級総合」を通して、何が育つのか、知りたいと願うようになった。そこで、本研究では、私の学級の 3 年間の「学級総合」の歩みを整理し、「浅間温泉まちおこC」の実践から、生徒にどのような育ちがあったのか考察することを目的とする。

### 2. 研究内容・研究方法

学級担任を務める平成 28 年度入学 C 組（39 名）で、「学級総合」に取り組み、生徒にと

って3年間の「学級総合」を通してどのような育ちがあったのかを、抽出生であるAさんとBさんの変容から考察する。また、一人ひとり生徒の振り返り記録や生徒の姿を通して、39名の生徒一人ひとりについて考察する。

### 3. 実践研究の概要

#### 3.1 活動の概要

##### (1) 題材となった浅間温泉について

「学級総合」の題材となった浅間温泉は、1300年以上の歴史を誇る温泉地である。かつて年間100万人以上を数えた観光客数は減少し続け、平成28年度の年間観光客数は約65万人となった。近年は老人養護施設に姿を変えた旅館も少なくない。かつての賑わいを取り戻すために、地域住民も様々な活動に取り組んでいるが、旅館や売店の後継者不足、地域住民の高齢化などの社会的課題が重なり、思うように進んでいない。

##### (2) 先輩から引き継ぎの依頼を受け、テーマ決定まで

私の学級が1学年だったときの3年C組（下平学級）は「学級総合」で、「浅間温泉まちおこC」を立ち上げた。その3年C組から「浅間温泉まちおこC」の2代目として、活動を引き継ぐことの依頼を受けることから、私たちの総合が動き出した。

##### (3) 活動当初の悩み

1年生の後期は、3年生と共に手しごと市や新そば祭りに参加したり、3年生が発案しこれまで2回開催してきた受験生餅つき応援会を引き継ぎ、企画、運営したりした。しかし、どの活動に取り組むときでも、3年生がこれまでの活動を通して浅間温泉の方々につくってきた信頼関係を壊してはいけないという思いが、生徒にも私自身にも強くあり、浅間温泉のためと言うより、3年C組の先輩のためという方向へ、活動への目的意識が向けられていた。

##### (4) 私たちの浅間温泉へ

転機になったのは、ちょうど「学級総合」が折り返しを迎える2年次の夏、「このまま先輩と同じ活動をしていても、活性化なんてできない」という声上がり、活動を見つめ直し、自分たち独自の意義ある取り組みとしての里山を中心とした「浅間温泉まちおこC」に方向転換した。それから、里山をPRするジオラマ制作、登ってよさを味わってもらうイベント運営、里山の歴史を語り継ぐ絵本・紙芝居制作など、10のグループに分かれて活動にしてきた。浅間温泉に関わる様々な立場の方と何度も対話を重ねることを通して、それまで3年生の先輩の活動を受け継ぐことに向けられていた思いが、浅間温泉の「ひと」や「もの」そのものに向けられるようになり、自分たちの「浅間温泉まちおこC」に変容していった。

#### 3.2 生徒の育ち

##### 3.2.1 Aさんの育ち

1年次の5月、「学級総合」のテーマを決める場面で、Aさんを含む学級の大多数が活動を引き継ぎたいと主張し、自分たちで一からテーマを考えたいと主張する5人と平行線を

たどる話し合いが続いた。独自の活動を希望する 5 人に対して、A さんは強い口調で反論していた。私は「学級総合」を通して、A さんが自分とは異なる考えをもつ他者の考えを受け止め、合意形成を図っていかうとする態度を養ってほしいと願うようになった。2 年後、今度は自分たちが 1 年生に引き継ぐのか議論になった。A さんは、自分たちがそうだったように姉妹学級である 1 年 C 組にプレゼンをして、ぜひ 3 代目として引き継いでほしいと発言した。しかし、A さんの考えに反対する声も多く、話し合いが膠着状態の中、A さんが、1 学年の 4 クラスすべてに、引き継ぎの依頼ではなく、自分たちが悩んでいることも含めてプレゼンすることを提案し、多くの賛同を得た。A さんはこのとき、1 年生への押し付けになってはいけなと懸念するプレゼンに反対派の友の考えを受け止め、それぞれの主張が歩み寄ることができる接点をみつけようとしていた。プレゼンをするか、しないかという二項対立ではなく、自分とは異なる考えを理解しようとし、考えの違いに折り合いをつけ、建設的な議論をする A さんの育ちがみられた。

### 3.2.2 B さんの育ち

あらゆる物事に対して、批判的な捉え方をすることが多い B さんは、入学当初、「学級総合」に対して、「やっても意味がない」と語っていた。1 年次は、グループの友と作業を押し付け合い、最後までやり遂げることができなかつたこともあつた。そんな B さんは、2 年次の秋からは「杖があると、もっと多くの人に里山に登ってもらえる」と感じ、杖づくりに取り組んだ。大人と子どもでは適した杖のサイズが変わってくることに B さんは気づき、旅館に 1 軒ずつ問い合わせたり、旅館以外の日帰り入浴施設にも杖を置いてもらえないか交渉したりして、自ら社会と関わるようになっていった。そして、3 年次の 11 月になつても休日に浅間温泉に出かけ、完成した杖を届けるために、受験シーズンに入ろうとする今もなお杖づくりに励んでいる。

### 3.3 A さんと B さんの育ちに関する考察

なぜ A さんのような育ちが見られたのだろうか。2 年生の夏以降、里山を中心とした浅間温泉の活性化に学級全体で取り組むようになり、A さんは里山への看板の設置を提案した。しかし、著しい少子高齢社会の浅間温泉では、看板を設置しても管理ができなと、地域住民から反対されたことがあつた。一筋縄ではいかなない実社会の複雑な課題に出会い、それと向き合うことを通して、A さんは自分の主張だけではなく、様々な立場から物事を考える必要性に気づき、異なる考えを受け止めようとする A さんの育ちがあつたのではないかと考える。自己評価が低かつた B さんにとっては、浅間温泉の方から認められたり、必要とされたりしたことが、彼の自己肯定感を高めたのではないだろうか。B さんが、製作した試作品の杖を旅館の方に緊張した表情で見せたとき、旅館の方から「B さんの杖がぜひほしい」という声が数多く寄せられ、B さんは「杖をつくってみたい」から「旅館の方に喜んでもらえる杖をつくりたい」へと、思いを高めていったのだろう。実際に社会から自分たちの活動が認められ、必要とされているという喜びが、自ら社会と関わり、責任をもってやり遂げようとする B さんの育ちの要因になつたと考える。

AさんとBさんの育ちは、様々な社会的課題を抱える浅間温泉の方々の本音と出会い、自分の思い通りにいかない難しさや、必要とされる喜びを味わった経験が要因になっていると考えられる。

### 3.4 一人ひとりの育ちに関する考察

3年間の「学級総合」を通してどのような育ちがあったのかを、一人ひとり生徒の振り返り記録や生徒の姿を通して、39名の生徒一人ひとりについて考察した。39名の生徒一人ひとりにとっての「学級総合」を振り返ると、AさんやBさんだけでなく、それぞれの生徒が、3年間の「学級総合」を通して変容していることをとらえることができた。

## 4. 研究の成果と課題

- ・地域の方から自分の活動を認められ、必要とされる経験をすることで、自己肯定感を高め、さらなる社会参画への意欲を高める姿に、これまで数多く出会ってきた。また認められるだけでなく、受け入れてもらえなかったり、厳しく指摘されたりすることもあった。一筋縄ではいかない実社会の複雑な課題に出会うことで、物事を様々な立場から考えられるようになった生徒の育ちをとらえることができた。地域の課題に向き合った3年間の「学級総合」を通して、生徒一人ひとりに育ちがみられた。
- ・一方で、地域の方との関わりについては、課題も見えてきた。地域題材に取り組むとき、地域の要望があり、生徒の思いだけでは進められない難しさを感じた。私は、浅間温泉の旅館や飲食店の経営者などが集う浅間温泉活性化に向けた会議に参加し、地域の悩みや課題、要望を聞いたり、現在の学級の取り組み状況と活動に寄せる教師の願いを伝えたりしてきた。その際、活動への願いや悩みなどを打ち明け、共有することで、少しずつ地域と生徒の両者の思いや願いが近づいていくことが感じられた。地域と生徒の間に立つ教師として、両者の思いが重なるためには、どのようにコーディネートしていけばよいのかを追究していくことが、地域の課題と向き合う総合的な学習の時間を指導する教師に課せられた課題であるといえよう。
- ・一人ひとりの3年間の育ちを考察することを通して、今まで捉えていなかった生徒の変容がみえてきた。これまでの私は、活動が停滞して「学級総合」の雰囲気が悪くなることを恐れて、活動内容ばかり構想しており、生徒一人ひとりが、浅間温泉にどんな思いをもっているのか、どんなことを乗り越えようとしているのか深くまで知ろうとしていなかった。そのため、「学級総合」の成果を語る時も、生徒の育ちではなく、学級やグループの活動の事実しか成果として語れなかった。本研究で一人ひとりの育ちを振り返ることで、生徒にはそれぞれの育ちがあることが明らかになった。今まで学級やグループという枠でしか生徒をみていなかった自分がいたことに気づかされた。

## 文 献

下平将輝(2017).『実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムに係る実践研究研究成果報告書』.文部科学省